

# 東陽中だより

教育目標 ～明日を拓く～  
・豊かな心 ・活きた知性 ・たくましい体  
発行責任者 小野寺 憲治  
文 責 佐々木 正道  
発行日 平成29年2月28日

## 期待が子供を育てる

東陽中学校長 小野寺憲治

3年生は、2学期後半から一気に受験モードに突入し受験部と命名し、放課後学習会を行い、並行して面接練習を続けてきました。冬休みにも登校し、5回も面接指導を受けた生徒もいました。この面接練習は、公立高推薦、私立高受検の数日前まで続きました。自分の進路を自身の手でつかみ取ろうと、待機時間には、生徒同士で面接官役と受験者役とを交代しながら練習に励んでいたグループもあり、事後指導をしている面接官役の生徒が、実心的なアドバイスを行っていることが印象的でした。入試後の自信に満ちた様子から皆うまうまいったように見て取れました。

私も面接指導を行いました。その中から気の付いた点を挙げると、「東陽中学校を一言で言うとどんな学校ですか。」との質問では、ほぼ全員が、「気持ちの良い挨拶ができ、明るく元気の良い学校です。」と答えていました。また、「尊敬する人はいますか。」の質問では、「担任です。副担です。小学校の時の担任です。」と答えた生徒がたくさんいました。教師冥利に尽きる大変嬉しいことでした。毎朝玄関で生徒を出迎え挨拶を交わしていますが、いつもより挨拶がしっかりできるようになった生徒が増えたようにも感じます。

そのような生徒たちの様子を見ているうちに、昔大学で学んだ「ピグマリオン効果」を思い出しました。それは、『期待することによって、対象者からやる気が引き出され、成績等が向上する現象をさす心理学用語』です。学業や部活動などで教師が期待をかけた生徒とそうでない生徒とでは、期待をかけた生徒の方が大きく成長するというものです。3か月にわたり、教師や生徒同士が仲間に対して頑張してほしいという期待をもって接しているなかで、その期待に応えるために努力し成長する生徒の姿を多くの場面で見ることができました。

また、尊敬する人の質問で「母」と答えた生徒も多く、最も身近にいて困ったときの良きアドバイスが子どもたちの心に染みているようです。

先述のピグマリオン効果では、母親と子どもとの関係における具体的事例も数多く報告されており、その一例として、母親に「一般的に、くつをはけるようになるのは何歳か。」「服を自分で着られるようになるのは何歳か。」等の質問をして統計をとってみると、あることを一般的に早くできると思っている母親の子どもの方が、そう思っていない母親の子どもより早い時期にできるようになったそうです。つまり、子どもがあることができるようになる時期を決定する大きな要因として、母親の考え方があるということです。

ピグマリオン効果は、10歳くらいまでは効果があり、その後は薄れていくようですが、中学生にもその効果は十分期待できます。失敗や悩みが成長のための大きな糧となるので、そのような経験をたくさん積んで成長してほしいと願っている母親の子どもは、その経験から多くのことを学びたくましく成長していくものですが、いつも自分がついていないと何もできないと思っている母親の子どもは、いつまでも自立心が芽生えません。

生徒にかけた期待はすぐには結果はできませんが、適度な期待をもって接することによって東陽中学校の一人一人の成長がより確かなものになるのではないのでしょうか。3年生全員が第一志望校に合格することを願っています。

